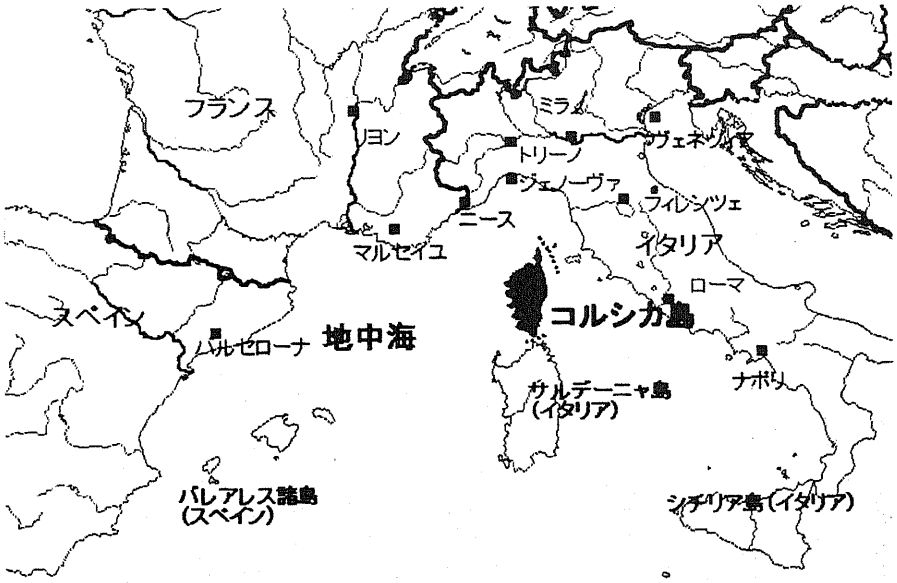
コルシカ島（フランス）における伝統音楽とその再生

長谷川秀樹

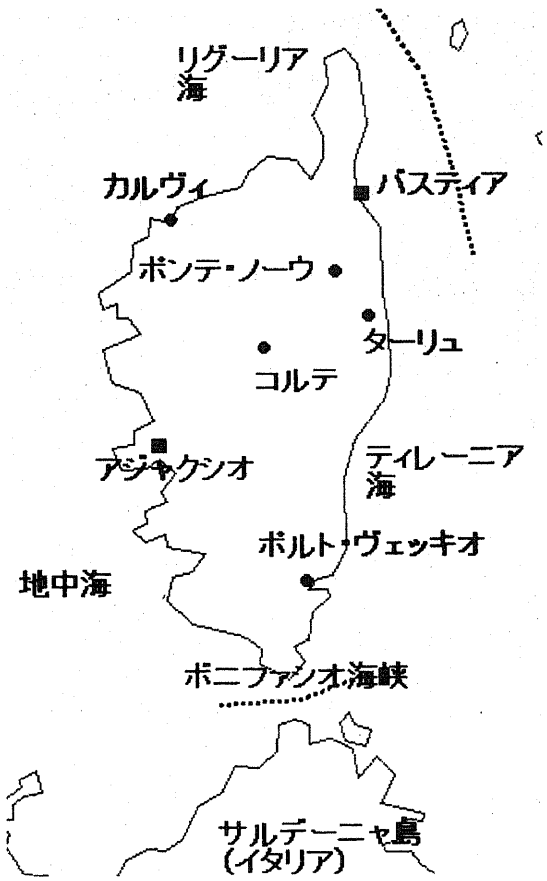
1．はじめに―コルシカの社会文化的独自性

コルシカ島はイタリア半島中部西海岸沖に位置する。北はリグーリア海、東はティレーニア海、西は地中海に囲まれている。南はボニファシオ海峡を挟んでイタリア領のサルデーニャ島と向き合っている。コルシカ島はイタリア領ではなく、フランス領である。



↑地中海におけるコルシカの位置（筆者作成）

しかしコルシカは地理的にも歴史的にもそして文化的にもイタリア半島に近似している。



→コルシカ島全図（筆者作成）

コルシカ島がフランス領になったのは大革命の二〇年前、一七六九年のことで、それより前は古代にはローマ（共和政および帝政期）、中世にはイタリア半島の都市国家ピーサとジェノーヴァの支配を受けていた。こうした歴史的経緯から建築や料理、

言語などにはイタリア半島の影響を伺うことが出来る。また、イタリア統一国家形成期（リソルジメント）から第二次世界大戦中にかけてイタリアでは絶えず失地回復運動（イッレデンティスモ）が起こり、文化的に「イタリア性」をもつ地域の統一国家への併合要求がなされていたが、コルシカは常にその対象となっていた（1）。

だが、コルシカ＝イタリア文化という図式は正しくない。少なくとも今日において、島民の多くはコルシカの諸文化はイタリア文化の一部であるという見方を拒否している（2）。第二次大戦が始まる前にも、コルシカの政治的自治を要求する運動グループ「ア・ムーヴラ」のリーダーでかつ言語学者でもあったペトル・ロッカは、当時イタリアのファシスト言語学者の間で定説となっていた「コルシカ方言のトスカーナ方言からの派生説」に異議を唱えていた（3）。トスカーナ方言は標準イタリア語に近い。この定説はコルシカの言語面でのイタリア性を裏付けるものであり、ファシストの要求を正当化するものであったため、以前からイタリアのファシスト言語学者はこぞってコルシカ島で言語調査をおこなっていた（4）。だが、ロッカはこの説に異議を唱え、コルシカ方言はトスカーナ方言から派生したのではなく、両方言とも別個の方言から派生したものだ、という主張を行ったのである（5）。この説の真偽はともかく、戦前からイタリア性に対するコルシカ側からの否定的な姿勢があったことは注意に値する。

また、中世以前から島に見られた独自の社会形態が、その後のコルシカにおける文化形成に独自性をもたらしたことも否めないだろう。ローマ支配期とピーサ支配期の間、約八〇〇年近くもの間、島は南方からのイスラム勢力（ヴァンダル族、サラセン族、ムーア族等）による襲撃を絶えず被っていた。沿岸に築かれていたローマの都市は悉く破壊され、砂に埋もれる。ローマ時代に山岳から下りて都市とわずかながら交流を保っていたコルシカの先住民たちは、再び峻厳な山奥に身を隠して暮らさざるを得なくなった。長らくコルシカ人は高度四〇〇～五〇〇メートルの人目に付かない谷間に、いくつかの親族だけで小さな集落「パエーゼ」を形成し、自給自足の生活を営む。主たる生業はヤギの牧畜、チーズの生産、栗栽培（栗を粉にしてパンを造り主食としたほか、粉を貨幣の代わりに用いることもあった）、豚の飼育と加工肉の生産などであった。婚姻も出来る限り近隣のパエーゼとの間で行い、きわめて強固な親族関係をつくりあげる結果となった（6）。一九世紀フランスのロマン主義小説にたびたび取り上げられたコルシカの風習、「ヴェンデッタ」はこうした強固な親族の連帯感により形成されたものである。こうしたコルシカの独自の社会形態が、コルシカ音楽の背景にあることは十分考えられよう。

2、コルシカの伝統音楽とその分類

コルシカ島の音楽は今、フランスで「ポリフォニー」と称されることが多い。「ポリフォニー」とは音楽的には「多声合唱（混声合唱）」を意味する。すなわち、高さの異なる声を併せて歌う形式のことである。だが、現代のコルシカ音楽はすべてこの定義通りの「ポリフォニー」にあたるわけではない。一方、島では単に「ウォーチェ」、つまり「声」と呼ばれているようだ（7）。よって、本稿でも「ウォーチェ」と呼ぶことにする。

一方、音楽人類学的に「ポリフォニー」、特に伝統的音楽とし

てのそれは、地域的分布があることが分かっている。地中海地域、より具体的に言えば、東はコーカサス地方からトルコやバルカン半島を経て、コルシカやサルデーニャ、バレアレスといった地中海の島嶼を含め、西はイベリア半島からアゾレス、マデイラなど大西洋の島嶼にまで至る帯状の地域は、ポリフォニーの伝統が顕著に見られるところである（8）。その中には戦後の急速な近代化の波に飲まれて消失したケースや、大陸にある中央政府によって「分離主義」の烙印を押されて歌うことが禁じられたケースもあるが、コルシカのように支援を受け、またCDなどによって販売されるケースもある。

なぜ、地中海域に伝統的ポリフォニーが多く見られるのか？

諸説を総合すれば以下の通りとなる。第一に、地中海沿岸および島嶼部は地理的に峻厳であり、コルシカと同様の牧畜（ヤギが主流）地帯であったこと、そして第二に、この地帯が長らくキリスト教とイスラム教の境界域であったこと、である。牧畜、特に季節によって家畜を異なる場所で飼う移牧において牧童の「かけ声」は不可欠である。自分あるいは自分の集落の所有するヤギを他のヤギと区別して呼び寄せ号令をかける際（コルシカ島には共同入会地、つまり複数の集落が共同に利用する移牧地があった）、彼らには微妙な声調が求められるのである。また、同じ集落の牧童どうし、あるいは違う集落の牧童に対して何らかの合図を発する際にも、「かけ声」およびその声調は重要である。異宗教間の戦線の地だった地中海沿岸、あるいは島嶼はヨーロッパ大陸に比べてキリスト教の定着が不十分であった。このため、中世以降、本格的にこの地にキリスト教を根付かせようとした聖職者たちはいろいろ方策を考案した。結果、キリスト教の教義を「聞き入れる性向」がまだ身についていなかったこれらの地域の人たちにいきなり教義を垂れるのでなく、歌によって教会に「誘い込む」という方法がとられた。これは聖書の内容や神について歌い上げる賛美歌とは異なるものである。こうした異なる二つの音楽的要素が絡んでポリフォニーが形成されたのではないか、という説が今有力である（9）。

コルシカの伝統音楽は他の地中海域と同様、キリスト教の普及以前から存在していたようだ。ヘロドトスの『歴史』には「ティヤーマ・エ・リスポンティ（かけ声問答もしくは歌合戦Chjama e rispondi）」に相当する不思議な習慣が島民に見られたことが記録されている（10）。

だが、伝統音楽については起源などその詳細についてはよく分かっていない。これは、コルシカの伝統音楽が何よりも口頭伝承によるものであったことにほかならない。後に伝統音楽の分類を掲げるが、こうした慣習がフランスで広く知られるようになるのは一九世紀前半のロマン主義文学によってである。

コルシカがフランスに併合された一七六九年直後から、フランス本土より聖職者や軍人、貴族や官憲らが島に派遣される。これはコルシカ島民の習慣を調査して把握し、フランスの支配を円滑に進めることが目的であった。その中でもゴーダン神父の『コルシカ紀行』はコルシカ人やコルシカ社会についての膨大な記録書であった。そこではコルシカ人の間には「ヴェンデッタ」という仇討ちの慣習があることや、こうした仇討ちなどによって死んだ人物に対して弔歌を歌うことなどがかかれている。また、歌は弔いだけでなく、その他の哀しい出来事に対しても、恋愛の場面でも用いられることが明らかにされている（11）。

一九世紀のコルシカを扱ったロマン主義文学は多数ある（メ

リメ、バルザック、モーパッサン、デュマ等）が、その多くはゴーダンのような併合直後島を訪問した人たちの記録書を資料としている。特にメリメは中編小説『コロンバ』(12)で随所にこの歌を挿入している。彼は『コロンバ』を書くために、文化財視察官として島に滞在し、直接島民と接触して歌を始めとするいくつかの習慣に触れる。彼は前作の『マテオ・ファルコーネ』(13)を著すにあたってゴーダンらの記録書や報告書を参照していたが(14)、歌が挿入される『コロンバ』では、これだけでは不十分であった。記録書や報告書の中には歌の内容や歌詞について克明に描かれていたものもあったが、肝心のメロディが記録されていなかったからである。メリメはこうしたメロディ、あるいは旋律がいかなるものであったかを耳で聴き体得するためにコルシカを訪問したのであろう。

それ以降も、コルシカおよびコルシカ人を扱った小説はフランスで出てくるが、歌そのものに対する関心はそれほどなくなる。地元コルシカでも、詩作は島民の日常的な趣味となり、新聞や同人誌などをにぎわしていたが、歌についてははっきりしていない。本格的な音楽人類学調査、つまり、テープレコーダーなど詩ではなく、音声、メロディあるいは旋律を忠実に記録できる機材を持ち込んで行った調査が実施されるのは、一九六〇年代前半のフェリックス・キリチによるものが初めてであった。

彼の音楽人類学的調査によって、これまで科学的には未知であった「ポリフォニー」についての実態が、おぼろげながら明らかになった。その結果言えることは、コルシカは非常に高度な詩吟が日常生活で営まれていたことであった。また、一九世紀ロマン主義小説の影響で歌を歌うのは女性というイメージがフランス本土ではあったが、実際は女性が歌うことは非常に限定されていて、圧倒的に男性が詩を吟ずることが多いことも分かった。

キリチの音楽人類学的調査によって、コルシカの伝統音楽は以下のように分類される。

A 聖歌

（a）賛美歌

（b）教会歌

ヨーロッパ大陸で言う「聖歌」とは範囲が異なる。コルシカ伝統音楽の聖歌には聖者や神をたたえ教義を織り込んだ「賛美歌（a）」以外に「教会歌（Canti chjesati）（b）」という部類がある。教会歌というのは「教会に人を呼ぶための歌」である。カテキスムに近いものであろう。これは、先にも述べたように、コルシカにキリスト教が定着するのが一一世紀以降と大陸に比べて非常に遅れたことが起因しているようだ。コルシカを始めとする地中海島嶼は、ローマ衰退以降、長期間にわたってキリスト教勢力とイスラム教勢力との「せめぎ合い」の場所であった。一一世紀以降ローマ教皇は島に教会を設置し、本格的な伝道を試みるが、なかなかうまくいかない。このことはブローデルの『地中海』にも描写されている(15)。長い間外界から閉ざされ、アウタルキー的生活を営んできた島民たちにとって、教会とはなんであるか、そして、教会ではどういう振る舞いをしないといけないかということが分からなかったようだ。つまり、ヨーロッパにおける聖／俗の区別とコルシカのそれが一致していないことに由来しているのであろう。

そこで、新たな支配勢力（特にローマ教皇に島の統治を委任されたピーサ）は、島民に教会に来てもらい、静粛に教義を受

け入れてもらうために、それ以前から島の習慣に根付いていた歌を利用して、教会歌を作成し、島民の間に広めた。教会歌の多くがピーサのイタリア語であるトスカーナ方言で書かれていたことからそれが伺える(16)。聖歌や賛美歌も教会歌の一部類として数えられるであろう。

こうした勢力の努力もあって、コルシカでは教会やマリアに対する信仰が篤い（キリスト教の教義に対する信仰とは別に）。パオリ独立政府時代に「国歌（innu naziunale）」に採用され、今なお島民によって歌われているDio vi salvi, Reginaもマリア信仰に基づいた聖歌である。

Dio vi saivi, Regina（17）

Dio vi salvi, Regina	女王様(＝マリア)、神が汝を助け給う
E madre universale	あなたは万人の母なのだから
Per cui favor si sale	そしてあなたは昇られる
Al Paradiso.	楽園に
Voi siete gioia e riso	あなたは喜んで微笑みかけられる
Di tutti i sconsolati	苦難を受けているあらゆる人たちに
Di tutti i tribolati	問題を抱えているあらゆる人たちに
Unica speme	たったひとつ希望をもって
Voi dai nemici nostri	あなたはわれわれに敵を下さる
A noi date vittoria	われわれが勝利をかちとるために
E poi l'eterna gloria	永遠の歓喜をえるために
In Paradiso.	楽園で

B世俗歌

（a）ソロ

（i）**弔歌**（vocelu）

（ii）**哀歌**（lamentu）

（iii）**恋歌**（sirinata）

これらのジャンルはすべて革命以前からのフランス人による島内探索によって明らかにされ、メリメの『コロンバ』など、コルシカを扱った一九世紀ロマン主義小説にも各所で挿入されている。だが当時、こうした詩歌はコルシカ独自のものとして扱われたというよりは、イタリアの延長という形で見られる傾向があった。今コルシカで「ウォーヂェル」と呼ばれる「弔歌」はイタリア語の「ヴォチェロ（vocero）」、「ラメントゥ」すなわち「哀歌」は「ラメント（lamento）」、そして「シリナーダ」つまり「恋歌」は「セレナータ（serenata）」とされていた（18）。コルシカのこれらの歌とイタリアや他の地中海域の同類の詩歌との音楽人類学的差異についてここで論じることは、かなりの時間と紙面を要し、また本題からも逸脱する事項であるのでここでは割愛するが、一九世紀から戦前のフランスにおいて「コルシカ音楽」としてイメージするものはこれらのソロであった。これは現在のコルシカ音楽のイメージとは大きく異なる。即興性という面は同じであるが、女性が一人で歌うもの、あるいは人の死や特定の悲惨さに触れたときや、恋愛など特定の感情表現を歌で表現するという図式は、当時のロマン主義観とも結びついているせいもあるが、今日のコルシカ音楽とは大きく異なる。

コルシカ知識人の中には、こうしたイメージでコルシカなら

びにコルシカ人を結びつけることを嫌う傾向がある（19）。ロマン主義の中でコルシカおよびコルシカ人には「野蛮」、「感情的」、「因襲的」なものとして扱われ、小説等の中で取り上げられた「ヴォチェロ」や「ラメント」は、さらにこのイメージを醸成させるのに一役買ったからである。

（b）デュオ、またはそれ以上（男性混声合唱）

（i）韻文詩歌

（三人男性混声合唱）

①パディエーッラ（paghjella）

②テルツェーッティ（terzetti）

（四人以上の男性混声合唱）

③ポリフォニー（pulifunia）

これらのジャンルは一九六〇年代のフェリックス・キリチの人類学的調査によってその存在が明らかにされた。この調査の結果、コルシカには非常に高度な即興韻律詩歌を日常生活の中で創出する習慣があることであった。

ターリュ村のパディエーッラ(20)

Quandu lu monte di Tagliu	ターリュの山が
Falerà in piazza à la chjesa	教会の広場に降りてくれれば
Or l'acqua di la funtana	飲むための噴水が
Per beie serà difesa	きっと沸き出すだろうに
Tandu penseraghju à tè	君〔＝ターリュの山〕のことを心配に思うほどに
O la mio lampana accesa	自分の心はほっと熱くなる

ポンテ・ノーウのパディエーッラ(21)

S'è tù passi per isse sponde	君はこのあたりで亡くなった
Pensa à salutà la croce	十字架に思いを馳せながら
Qui sò cascati l'antichi	過去に亡くなったのは誰だろう
Cantendu ad alta voce	大声で歌いながら
Per difende a libertà	自由を守るために
Contr'a u nemicu feroce	残忍きわまる敵〔＝フランス〕と戦って

その集大成と言えるものが「パディエーッラ」である。その中で最も有名であるターリュ村のパディエーッラの詩とポンテ・ノーウのパディエーッラを掲げたが、詩的には①二句をもって一連とし、②三連をもって一つの詩とし、③一つの句は八音節とし、④各連における句の最後は押韻する、という原則をもつ。この原則に従い、かつ即興で創られたものだけを「パディエーッラ」と呼び、ターリュ村のような「名パディエーッラ」は、後世に歌い継がれることになる。また、これを村の祭りや村人が集うところで成し遂げた者は「名誉ある者」としての扱いを受ける。しかし「パディエーッラ」を生み出すのは至難の業である。一方、テルツェーッティは、即興でかつ押韻することはパディエーッラと同じであるが、句や連の構成は比較的自由である。四人以上の男性によって歌われる「ポリフォニー」は、さらに規則が緩やかなようである。

音楽的にパディエーッラおよびテルツェーッティは、「高声

(terzu)」、「中声（secunda)」、「低声（bassu)」の三声で構成される。パディエーッラは「中→低→高」の順に歌い始める（高声が「テールツ」、つまり「三番目の」という意味になっているのはこの順序からである)。「中」と「高」、「中」と「低」、そして三声の混声が交互に繰り返されるが、パディエーッラには「高」と「低」の組み合わせ部分はない。音楽的に見てもパディエーッラは相当な技術が必要である。テルツエーッティはもっと規則が緩やかで、ときに高声が全くない歌もある（つまりデュオ)。ただし、パディエーッラもテルツエーッティも詩を歌い上げるのは中声だけである場合がほとんどで、高声や低声の役割はコーラスやハミングであることが多い。

混声合唱の特徴はソロと違って、特定の感情的場面、つまり弔いや悲哀、恋愛に限定されたときに歌うのではなく、日常生活で何気なく歌われるものである。自然の美しさを表現する者もあれば、社会や政治を憂いる歌もある。ターリュ村のパディエーッラも特定の感情を歌い上げたものというよりは、日常の出来事を歌にしたものと言えるだろう。

（ii）散文詩歌（versu)

①政治歌・選挙歌（canti di pulitica, canti d'elezioni)

②労働歌（Tribbiera)

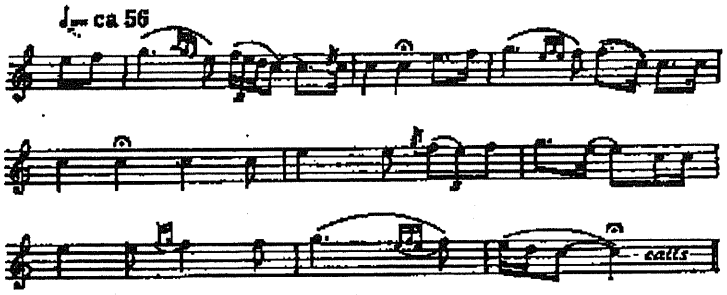
③ティャーマ・エ・リスポンディ

（かけ声問答 chjama è rispondi)

④クントラースティ（cuntrasti)

散文詩歌の種類は非常に多岐に渡るので、ここではその中でも主要な①政治歌・選挙歌、②労働歌、③ティャーマ・エ・リスポンディ、④クントラースティの三つを取り上げ、①②③④のいずれでもないものは、（ii）散文詩歌（ウェールス）として扱っておく。

（1）政治歌・選挙歌および労働歌



↑トリッビエラ（労働歌）の譜面（「出典」ネトゥル一九七四年六〇頁）

先にコルシカにおいては政治や選挙が音楽の重要なテーマの一つであることを触れた。これには様々な要素が考えられるが、コルシカにおいて、あるいは他の地中海島嶼地域にも見られるかもしれないが、政治的なものとそうでないものとの区別が曖昧であることに起因している。例えば投票行動などがそれで、コルシカでは縁故関係や有権者と代議士との間で確立された恩顧と忠誠という象徴的関係が投票行動を決めていた。選挙とは有権者がその「親方」たる代議士に自らの忠誠を示す「儀礼」でもあった（22)。

コルシカでは近代に男子普通選挙制度が施行されてから（第二共和制期)、ミッテラン地方分権化威嚇が本格的に実施される一九八〇年代初頭まで「クラン」と呼ばれる代議士とその支持者で築かれる独特の社会形態が存在していた。これは先に述べ

た恩顧と忠誠の象徴的、あるいは名誉の感覚に基づく関係によるもので、例えば代議士は支持者親族のプライベートな冠婚葬祭には必ず出席して顔を見せるなどし、支持者は親族こぞって選挙の際にこれに応えるのである（23）。

そうしたコルシカ社会において、選挙の際、投票者が隊列を組み、投票所まで歌いながら行進するという光景が当時、普通に見られた。これは儀礼的意味もあろうが、なによりも全員が同じ候補に投票するか仲間どうしで確認する意味もあった。こうした慣習はアレクシス・ド＝トクヴィルが『回想録』に記しているように第二共和制期（一八四八―一八五二）のフランス本土農村地帯でも見られた（24）。しかし、二〇世紀後半になってもこうした慣習が継続されていたのはフランスではコルシカだけだった。

労働歌は「トリッビエラ」と呼ばれ、島内山岳部各地でヴァリエーションがある。しかしその多くは牛に鋤を引かせる際に発したかけ声が基になっている。また、近代から戦後にかけては島内で公共事業にともなう道路建設や森林の伐採などが人力を用いて行われたが、その際、これに従事した島民が肉体労働の辛さを紛らわすためにも歌われたという（25）。

（2）ティャーマ・エ・リスポンディとクントラースティ

「ティャーマ」とはイタリア語の chiama、フランス語の appel、すなわち「アピール」や「かけ声」を意味するコルシカ語である。「リスポンディ」とは「応答」や「回答」を意味する。つまりこの種類のウォーヂェは、誰かが発したかけ声に別の誰かがそれに応答する形式を指す。先に述べたようにヘロドトスの『歴史』に既に島民にこの習慣があったことが記されているように非常に古くから島に根付いていたことが伺える。

今日でもバーなどで即興として島民に歌われている。そのテーマは恋愛から現在の政治社会情勢など多岐に渡る。これは一種の「ゲーム」であって、二人でティャーマ・エ・リスポンディを始めた場合、どちらか一方が返答に行き詰まるまでかけ声問答が続けられるのが通常である（「リスポンディ」が複数形になっているのはこのためである。単数形は rispondu）。パディエーッラとは異なって厳格なルールがないので、多くの島民が日常的に楽しんでいる。

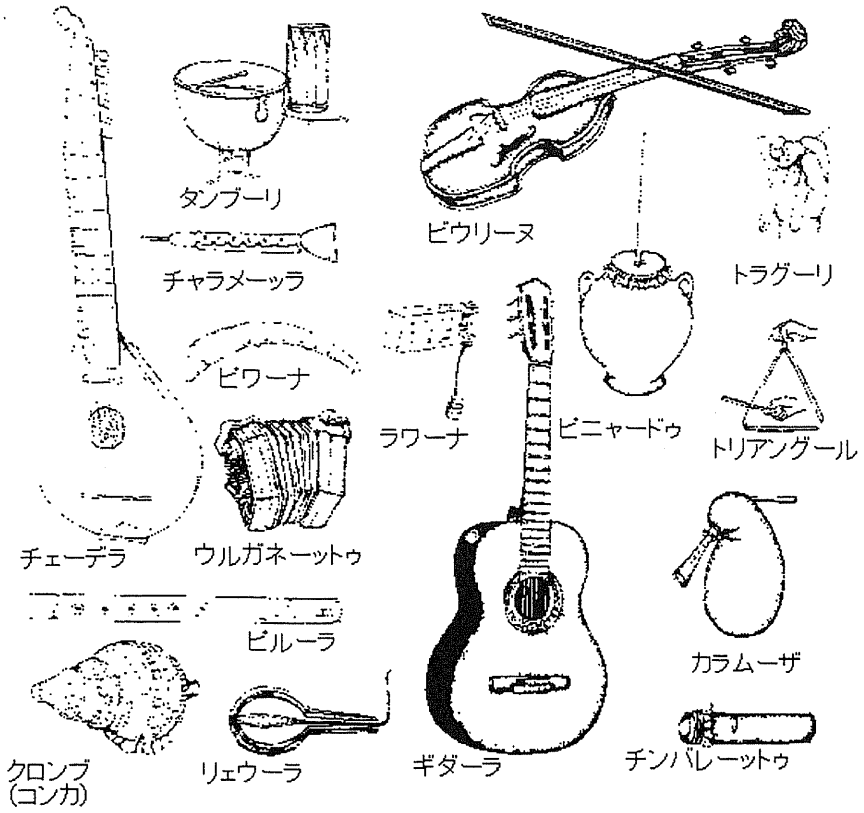
「クントラースティ」は男女のペアで行うティャーマ・エ・リスポンディ、あるいは他のウォーヂェの形式である。一九世紀ロマン主義文学の影響でコルシカには長らく歌を歌うのは女性というイメージが出来ていたが、戦後の人類学調査は逆に女性は習慣的にほとんど歌わないことが明らかにされている。クントラースティ形式も滅多にないとされている（後述するように女性だけのウォーヂェは近年幾つか登場しているが）。

C．その他（器楽）

コルシカのウォーヂェにはほとんど楽器は使用されない。しかしながら例外的に楽器が用いられるケースがある。だが、それでもそのほとんどは楽器のみの演奏である。したがって、器楽をウォーヂェに分類することにはためらいがある。一応ここではその他ということにしておく。

コルシカには伝統的な楽器が幾つかある。次のページの図にその一部を紹介しているが、主たるものとしてはコルシカのパグパイプ「カラムーザ」、コルシカのシタール「チェーデラ」、ギタ

ー「ギダーラ」などである。



➔ コルシカの伝統音楽で使用された楽器（ストルメンティ）（［出典］*Dizzionariu Corsu-francese, t3,* Albiana, 1984, p.924）

3．「ウォーヂェ」の衰退と復興

さてその「ウォーヂェ」であるが、一九六〇年代初頭から急速に衰退を始める。これはちょうどフランスが高度経済成長を遂げているときであり、コルシカにも急速に都市化の波が訪れているときでもあった。

「ウォーヂェ」の衰退の直接の原因は「歌い手」すなわち「ウォヂェラドーリ（voceratori）」の減少であった。ウォーヂェは口頭伝承であるからウォヂェラドーリの減少は即、ウォーヂェの衰退につながる上に、パディエーッラのような高度な素養を要するウォーヂェの場合、素養をもつ人間がいないことは、そのジャンルの絶滅にもつながる。

では、ウォヂェラドーリの減少の原因は何か？　それはウォーヂェに絶対不可欠なコルシカ語そのものの衰退によるところが大きい。フランス語やイタリア語では特にパディエーッラなどの厳格なウォーヂェは歌えない。英語やカタカナ文字で演歌を歌えないのと同じである。

それでは、コルシカ語の衰退の原因は何か？それは当時の若者がコルシカの社会や文化を「恥」、「田舎くさい」、「かっこ悪い」という風に否定的に評価していたことである。この当時のコルシカを含めたフランスの地方では、情報や文化の発信地であったパリへの憧憬心を強く抱く若者が圧倒的に多かった。若者は田舎で農業や力仕事をするよりもパリの大学に行き、パリで華やかな、あるいはお金の儲かる仕事につくことを望んでいた。当然、パリの生活様式や文化は彼らの憧憬の的であり、同じ時代に東京に出ることを憧れていた日本の若者にも通じる点であろう。折りしも当時フランスの音楽は、イヴ・モンタンやジュリエット・グレコに代表される五〇年代のシャンソンから、シルヴィ・ヴァルタン（26）やフランソワーズ・アルディ、フランス・ギャルらに代表されるポップス（27）なの時代へと移行しつつあり、こうした音楽の革新もまた若者の心を捉えるところとなったのは言うまでもない。

そうした若者の心理状況はコルシカの若者にも例外なく見ら

れ、折からの高学歴志向もあって、当時大学のなかったコルシカは人口が減少する（28）。また、フランス本土のような核家族化がコルシカでも進行し、かつてのようなコルシカの大家族は急減する。このことはさらにウォーチェやコルシカ語の伝承を困難にした。また、若者の多くは孤独で肉体的にも精神的にも過酷であるヤギ飼いなどの移牧農業を敬遠し、移牧文化と結びついていたウォーチェに対しても否定的姿勢を示していたことは想像に難くない。日本の農村でもこの当時、若者は地元で農業を継ぐことよりも都会で農業以外の仕事につく方を選び、またその結果、農村文化の衰退傾向に拍車がかかったのと同様である。

今、コルシカで最も有名なポリフォニー・グループ、ベルナルディーニ兄弟はパディエーッラの名ウォチェラドーリ、ユーリュ・ベルナルディーニ（29）を父にもち、小さいころから村祭りなどで美しいウォーチェを披露していた。しかし、小学校高学年、あるいは中学校になるにつれ、兄弟は人前で「ウォーチェ」を発することを恥ずかしさから避けるようになり、家の外ではまったく歌わなくなったという（30）。

4．リアーッキストゥ

一時は風前の灯火となっていた「ウォーチェ」は、新しい形態で復興する。ウォーチェが「現代コルシカ音楽」として復興の道を探る「リアーッキストゥ」の時代である。

「リアーッキストゥ（riacquistu）」（31）とは、「再生（ルネッサンス）」という意味に近いコルシカ語であるが、「文芸復興」というよりも、「一度身体から離れたものを再び身に着ける」というフランス語で reacquisition（再体得化）という意味合いを強くもつ。さらに、一度否定的評価を下したものについて「再評価」する、という意味もある。コルシカ文化の「見直し」、「取り戻し」と言ってもよいであろう。

「リアーッキストゥ」は、六〇年代フランスの周縁各地で起きた「地域主義（régionalisme）」運動がきっかけで生じた。「地域主義」とは何かという明確な定義をここで下すことは非常に困難である（32）。だが、あえてそれは何であったか端的に述べるとするならば、地域主義とは「中央集権的国家の戦後高度経済成長期に起きる中心―周縁型一極偏在的発展過程において、その国家の周縁部にて散発的に発生する諸闘争から何らかの全国規模の運動へと導く過程に現れる、経済を中心とする地域的利益の防衛のため、中央に集権されている何らかの政治的決定権を周縁にもたらすように要求すること」である。

そしてコルシカなど周縁の文化、あるいは言語は、革命以降二世紀近くにも及ぶ中央集権政策によってアイデンティティ面まで失われつつあった「地域」意識を再生し、運動へと動員する手段として用いられた。つまり、バラバラで企業や狭いムラのなかでしか見いだせなかったアイデンティティをより広範囲な地域で創り出そうという目的のために用いられた。ブルターニュ地方の「フェスト・ノス（夜祭）」はその典型であり、コルシカでも一九六〇年代当初の核実験施設建設反対運動やアルジェリア帰還者受け入れ反対運動の過程（33）でコルシカ文化やコルシカ語の見直しやアピールが行われたのである。

コルシカにおいてまずコルシカ語の再評価と教育権の獲得を目的とする運動が起こった。当初、地域主義がコルシカ島民のアイデンティティ覚醒のためにコルシカの言語を盛んに用いたことがその発端であるが、次第にそれは政治的係争や経済的係争を目的とはしない人々に波及する。学校の教員たちはコルシカ語の学校教育権を要求し、また若者はつい最近まで蔑まれていたコルシカ

の文化や社会に関心を向け、これを再興しようと立ち上がったのである。その典型がコルシカ文学の再興であり、これにはデャグム・フジーナやデャグム・ティエール（34）ら若き文士たちが活躍の場を見せた。

音楽について言えば、デュワンバウール・ボレーッティ（35）やペトル・ゲルフーッチ（36）らが結成したグループ「カンター・ウ・ボーブル・ゴールス（以下「カンター」と記す）」（37）が革命的な偉業を成し遂げた。廃れつつあったコルシカの伝統的ウォーヂェをメンバーが島内各地をまわりながら歌い上げることで保護活動をすると同時に、そうした伝統に根付いたものに、新しい要素を組み合わせることで新しい音楽を創りだしたのである。また、彼らはアイルランドやバスクなどヨーロッパや地中海、あるいはラテンアメリカなどの他の少数民族音楽とのインターフェイスも試み、コルシカ音楽の開放性をアピールすることにも成功する。こうして「カンター」のウォーヂェは島民の強い支持を得て、さらにフランスに住むコルシカ出身者を通じてフランス本土にも反響を及ぼす。

だが、七〇年代後半、コルシカ地域主義は極めて重要な転換期にあった。七五年八月のアレリア事件（38）をきっかけにコルシカでは次第に民族主義が高揚し、これを鎮圧しようとしたフランス内務当局と島民との間で激しい闘争が起こる。島民、特に反体制的傾向を持つ若者については内務当局は厳しくマークし、時に電話の盗聴や不法な尾行など露骨なやり方で容疑者として逮捕投獄を繰り返していた。「カンター」の売上金はこうした政治犯の保釈金にあてられていた。その意味で七〇年代に復興したコルシカ音楽の目的は政治的なものであったとも言えるだろう（39）。

「カンター」の成功をきっかけに、コルシカ島内でコルシカ語による「ウォーヂェ」を歌うグループが雨後の筍のように登場する。一九七七年にはティアーミ・アデャレージ（40）やイ・ムヴリーニ（41）など現代のコルシカ音楽を代表するグループが次々と「ウォーヂェ」を発表する。一九八〇年に「カンター」が解散し、ボレーッティやゲルフーッチらがソロでも成功を収めると、ソロで活躍する者もあらわれ、中にはアントワーヌ・チオージなどのようにパリでシャンソン歌手として活躍していたコルシカ出身者も帰島してコルシカ語での音楽活動を開始する。

彼らの音楽活動を支えていたのが、「カンター」の活動にあわせて作られていたレコード会社「リゴールドゥ（ricordu）」（42）であった。現社長のアントワーヌ・レオナルディはかつての「カンター」のメンバーであり、解散後はプロデュース活動に専念し、島内で若手の発掘にも精を出している。同じく元「カンター」のメンバーだったボレーッティも島南部のサルテーヌに音楽学校を開き、若手の育成に力を入れている。こうしたことから一九八〇年代は、新たな伝承の取り組みが始まり、政治的活動からひとつの音楽ジャンルの存立に不可欠な市場化、あるいは商業化への取り組みへと転換した時代である、と言えるだろう。

5．課題

ミッテラン大統領を首班とする社会党政権が一九八一年以降取り組んだ地方分権改革は、不十分であるとは言え、革命以降続いていたフランスの中央集権主義志向の転換点となった。これまで国家あるいは一般民衆があまり考えることがなかった地域語や地域文化について真摯に取り組むきっかけとなったからである。その中でコルシカはその独自の歴史および文化面から「特別な地位を持つ州（région avec le statut particulier）」という位置づけを法的に付与され、島民の選挙により選出される議員によって運営され

る「コルシカ議会」が設置された。そしてこれに付随し有識者で構成される言語、文化、教育面での諮問機関も置かれた。こうしてコルシカ州とフランス共和国との間でコルシカ語（文部省コルシカ学区）およびコルシカ文化（文化省地方局）を再生させるための体系的な方法が、部分的ではあるが確立されることとなった。

当時、コルシカの「ウォーヂェ」は民族主義と関連がまだあるものと見なされ、保革政権時代にコルシカに派遣されたロベール・ブルサール知事に徹底的な弾圧を受けたが、多くの島民は一部の民族主義者の暴力には反対したものの、ブルサールの「ウォーヂェ」に対する不当な抑圧には徹底的に抵抗した。やがて新生「ウォーヂェ」は広く島民の心に受け入れられ、娯楽が少ない島での数少ない余暇手段となっている。ミッテランの分権政策で公営テレビやラジオ、教育機関におけるコルシカ語やコルシカ文化の使用権限が州に付与されたこともあって、八〇年代後半以降、一般にこうした文化にふれる機会が目に見えて増えていった。

こうした「ウォーヂェ」の再生は、単に地域アイデンティティの覚醒だけに貢献したわけではない。コルシカ産の農産物あるいは工芸品の販売にも一役買っている。「ウォーヂェ」のアーティストがコルシカ島の小中学校の「コルシカ語・コルシカ文化」科目にボランティア出演するというケースもある。また、今後は、地域語や地域文化を取り入れた福祉が試みられようとしている。本来、伝統的な言語や文化の中で育った高齢者たちにとって、よそよそしいフランス語よりはコルシカ語で接した方が親近感が沸くからだ。今ではフランス共和国やＥＵのソフト面、ハード面における支援も受けている。

現在は約六〇ものプロ・アマをあわせたユニットが主として島内で「ウォーヂェ」を上演している。バスティアやアジャクシオなど島内の都市部に偏らないで、小さな山村の教会でも頻繁にコンサートが催されている。そして、彼らの活動はコルシカ出身者が多く居住しているパリやマルセイユ、ニースなどの「コルシカ人街」にも広がっている。島民の多くは職を得るために若いうちにフランス本土に離れなければならない。彼らの多くはいずれは島に戻ることを志し、そのために選挙人名簿や不動産を島の中の生まれた村に残している。こうした人たちと島とのつながりにも「ウォーヂェ」は何らかの役割を担っていると考えられるだろう。

だが、課題もある。「ウォーヂェ」の今後の方向性である。ウォーヂェの人気はコルシカや本土の「コルシカ人街区」だけでなく、フランス国民にも浸透した。一九九六年にフランスの武道館と呼ばれるベルシー体育館を満員にした「イ・ムヴリーニ」はその典型であろう。だが、売れれば売れるほど彼らは島から離れ（43）、「ワールドミュージック化」（44）してしまったと嘆く島民がいる。

また、「ウォーヂェ」がもてはやされる中で、これをはぐくんできたコルシカ語それ自体は、教育が盛んになっているにも関わらず、日常生活で使えるほどには至っていない（45）。これは学校以外でコルシカ語を用いる場がほとんどないからであるが（45）、こうした現状では、コルシカ語は消滅の危機から脱しているとは言えない。「ウォーヂェ」の成功はそうした事実を実は隠蔽してもいる。

今後はこうした地域的課題の解決を「ウォーヂェ」そのものの発展と絡んで考えることがコルシカの地域社会に求められるであろう。

註

（1）Antoine Leca, «"A muvra" ou le procès de la France par les autonomistes corses (1920-1939)» et «"A muvra" ou l'autonomisme corse

de la réhabilitation de l'Italie à la tentation fasciste», dir. M. Ganzin *L'Europe entre deux tempéraments politiques: Idéal d'unité et particularismes régionaux*, Presses universitaires d'Aix-Marseille, 1994, pp.525-564.

（2）Jacques Thiers, *Papiers identité(s)*, Albiana, 1989, Antoine Ottavi, *Des Corses à part entière*, Seuil, 1979 等参照。さらに第二次大戦中に島がイタリア軍に占拠されたとき、ムッソリーニは島民に「これはコルシカのフランスからの解放である」と呼びかけ支援を求めたが、島民の多くはこれに抵抗したという事実をあげておこう。

（3）*A Muvra*, 21-28 aprile 1935, L'île, mars 1935, 長谷川秀樹『「コルシカ民族＝人民」の生成』関西学院大学出版会　一九九九年　三七頁。

（4）A. Leca, 1994, pp.553-554, Alain Pasqualini,«L'organisation de l'action irrédentiste», *Etudes Corses, No.33*, La Marge, 1989, p.60, 具体的に誰がどのような研究を行っていたのかについて邦文で以下の文献に詳細に紹介されている。E・コセリウ、柴田武・W・グロータース（訳）『言語地理学入門』三修社　一九八一年　三三頁、長谷川前掲書　一九九九年　三四―三五頁。

（5）注（3）参照。

（6）コルシカの集落形態や通婚圏に関する人類学的調査は比較的早くから存在する。代表的なものとして以下の文献を挙げておく。

（7）ウォーヂェ（voce）とはコルシカ語で「声」を意味する。イタリア語でも「声」は voce（ヴォーチェ）であるが、発音は異なる。因みにコルシカ語の voce は辞書や単語集などで単独で用いられる場合と文章や会話で用いられる場合とで発音が異なる。スクンスナドゥーラ（scunsunatura）と呼ばれる子音音声の有声化現象で、アクセントのない母音に挟まれた子音が有声化する。辞書等でこの単語が用いられる場合は音韻論的には「ボーヂェ」となるが、文章や会話では voce は女性定冠詞 a（フランス語やイタリア語の la に相当）を伴うため、a voce は「アウォーヂェ」となる。よって本稿では voce は「ウォーヂェ」としている。コルシカ語の音韻論・音声学的研究については以下の文献を参照。Jean-Marie Comiti, *A pratica è a grammatica*, Squadra di u Finusellu & Centru Culturale Universitariu, 1996, pp.9-105, Marie-José Dalbera-Stefanaggi, *Langue Corse: une approche linguistique*, Klincksieck, 1978, Jacque Fusina, *Parlons corse*, L'Harmattan, 1999,pp.20-64.

（8）«Les musiques du Monde», *GEO No.238*, 1998, pp.133-136.

（9）注（8）に同じ文献、および Philippe-Jean Catinchi, *Polyphonies corses*, Acted Sud, 1999, pp.39-53 を参照。

（10）Roger Caratini, *Histoire du peuple corse*, Criterion, 1995, p.21.

（11）Abbé Gaudin, *Voyage en Corse, et vues politiques sur l'amélioration de cette isle*, Lefèvre, 1787, ただし上記文献は Lacour 出版社より一九九七年に復刻されたもの。

（12）Prosper Mérimé, «Colomba», *Colomba et autres nouvelles, t.1*, Générale Française, 1983[1840], 杉捷夫訳『コロンバ』岩波書店一九六五年

（13）P.Mérimé, «Mateo Falcone», op cit., 1983[1833], 杉捷夫訳「マテオ・ファルコーネ」『エトルリヤの壺―他五篇』岩波書店一九七一年

（14）メリメをはじめとするロマン主義文学者と一八世紀末のコルシカ探索との関係については Pierrette Jeoffroy-Faggianelli, *L'image de la Corse dans la littérature romantique française*, Presses universitaires de France, 1979, 大岡昇平「マテオ幻想」「コルシカの脱走兵」「凍った炎」『大岡昇平全集』第二〇巻　中央公論　一九七六年も参照

（15）「これはまた一六世紀のコルシカ島の宗教生活の一端を垣間見せる伝道の歴史の一章でもある。数世紀前に、フランシスコ会修道士によってコルシカの人々が教義を教え込まれていただけにますます意義深い一例である。カトリックによるこの最初の再征服は、いかなる痕跡を残していただろうか。数多くの資料が示すところによれば、イエズス会が島に接近し、イエズス会の福音の教えとローマの秩序を押しつけるときに、島の住民の精神生活は驚くべきことになった。司祭は読み書きができても、ラテン語も文法も知らず、またもっと重大なのは祭壇の聖礼典の形式を知らないことである。多くの場合、司祭は俗人と同じ服を着ていて、畑や山で働き、子供を万人の前で育てる農民である。こういう司祭を持つ信者が考えるキリスト教はひどく変わっている。信者はクレドも主の祈りも知らない。ある者は十字の切り方を知らない。盲信より前に迷信が立派なキャリアを持っている。島は偶像崇拝的であり、野蛮であり、半ばキリスト教世界と文明の外にある。そこでは人間は人間に対して無情であり、容赦ない。教会の中でも殺し合いがおこなわれ、司祭といえども槍や短刀を使い、世紀半ばに島にやってきた新しい武器、らっぱ銃を使い、島の紛争をあおり立てる。しかし、荒廃した教会のなかにも、雨水は絶え間なく流れ、草が生え、蛇が住む・・・」F・ブローデル、浜名優美訳『地中海Ⅰ環境の役割』藤原書店一九九一年五〇ー五一頁

（16）P.-J.Catinchi, 1999, pp.48-50

（17）歌詞は Antonio Leonardi/Les Secrets d'une Terre/Ricordu 1991,より。訳は筆者による。

（18）『コロンバ』の第三章参照。

（19）P.-J.Faggianelli, 1975.

（20）歌詞は I Muvrini/A voce rivolta/PolyGram 1991 より。訳は筆者による。これは稀にみる夏の干ばつの辛さを歌ったものとされる。

（21）Antoine Leonardi/Les Secrets d'une Terre/Ricordu 2001 より。訳は筆者による。ポンテ・ノーウは一七六九年春に独立コルシカ軍とフランス軍との戦闘が行われた場所。

（22）フランス併合以降のコルシカの政治社会についての記述は多い。Jean-Louis Briquet, *La tradition en mouvement: clientélisme en Corse*, Belin, 1997, Marianne Lefèvre, «Démocratie et géopolitique en Corse», *Hérodote, No.69-70*, 1993, pp.129-160, Gérard Lenclud, «Des idées et des hommes: Patronage électoral et culture politique en Corse», *Revue française de science politique, No.5*, 1995, pp.777-778, Claude Olsoni, «Clanisme et racisme: Hypothèse sur les relations inter-communautaires en Corse», *Peuples méditerranéennes, No.51*, pp.191-201, Francis Pomponi, «Pouvoir et abus de pouvoir des maires corses au XIXe siècle», Etudes rurales, No.63-64, 1976, pp.153-169 などが主要文献。なお邦文では拙稿「コルシカにおける顧客主義」『日仏社会学会年報』第七号一九九七年を参照。

（23）日本の政治問題としてとらえられる「口利き」のように代議士と有権者が優先的な公共事業の配分や就職先の斡旋など経済的な利益で結ばれる関係も「クラン」には認められるが、あくまでその本質は非経済的な関係である。

（24）アレスシス・ド＝トクヴィル、喜安朗訳『フランス二月革命の日々』岩波書店一九八八年　一六六ー一六七頁（原題は souvenirs『回想録』一八九三年に刊行）。

（25）B・ネトゥル、佐藤馨他訳『西洋民族の音楽』東海大学出版会　一九七四年　五九頁。

（26）シルヴィ・ヴァルタンの登場は「アイドル」という概念を創出させるきっかけになった。日本における七〇年代以降の「ア

イドル」の登場は、フランスの六〇年代のこうした現象が波及したものであると考えられる。

（27）日本では「フレンチ・ポップス」とされているが、フランス本国にはそのような名称はない。

（28）戦前、最大時に二五万人いた島民人口は戦後この時期、一五万人まで減少する。しかもこの数字は選挙人名簿に登録している人口であり、投票には出身地の村や町にわざわざ帰島するという現在にも見られるコルシカ人の心性を考慮すると、実際の人口はさらに少なかったと考えられる。

（29）フランス名ジュール Jules、コルシカ島民は戸籍上、フランス語の名前をもつが、通称としてコルシカ語名を持つ者もいる。苗字はコルシカ語のものがそのまま登録されている。

（30）P.J. Catinchi, 1999, p.33.

（31）「リアーッキストゥ」は当時用いられていた言説ではなく、今日的視点で当時を振り返る際に用いられる言説である。当時は「リアーッキストゥ」よりはフランス語の「コルシチュード（corsitude）」という言説が用いられた。この言説は当然、二〇世紀半ばごろにフランス文学の中で起こっていた「ネグリチュード（négritude）」（フランス植民地における有色人種作家によるフランス語での文学運動、マルティニークのエメ・セゼールやセネガルのレオポール・サンゴールらがその中心）にその発想を得たものである。この文学運動は植民地主義をとらえなおす過程で黒人性の中に誇りを見いだしこれを再評価するものであった。一九六〇年代コルシカでは特にコルシカ民族主義の高まりの中でコルシカ人であることやコルシカ語、コルシカ文化に対する再評価から「コルシチュード」と呼ばれていた。しかし、いくら反植民地主義を唱えようとも、コルシカの歴史的運命を純粋なフランス植民地主義としてとらえることは出来ないし、反植民地主義＝民族解放主義、としてのコルシカ民族主義は既に消失していることから、こうした言説は現在避けられている。本稿においてもより客観的な判断から「リアーッキストゥ」を用いることにする。

（32）一九六〇年代フランスの地域主義について筆者はコルシカ、ブルターニュ、オクシタニア（フランス南部）での研究を事例を参照に部分的であるがその本質を分析している。拙稿「現代フランスの地域主義運動―一九六〇年代コルシカを中心に」（『立命館国際研究』第一一巻一号　一九九八年　に所収）を参照。

（33）コルシカのこれらの政策はいずれもド＝ゴールの独自外交路線とこれと表裏一体であったジャコビニスムという強権的とも言える執行権優位型中央集権政策の一環であった。ド＝ゴール独自外交とは①対米依存型外交からの脱却と②植民地独立支持による第三世界との連帯、であるが、①は必然的に独自の軍備政策およびエネルギー自給政策を伴うこととなった。フランスで唯一自給できる地下資源はウランだったことは、必然的に核の軍事利用（核兵器）と平和利用（原発）の融合政策へとつながった。コルシカに両方の核利用を目的とした地下実験施設を建設する計画を当時の政府が発表したのは、そうした核の利用や人口の少ないコルシカで地下実験にふさわしい鉱山跡地があったこともあるが、最大の原因はアルジェリア戦争とこれに続く独立でフランスはこれまでサハラ砂漠で行っていた核実験が不可能になったことが直接の原因であろう。コルシカの反発を受け、翌年には政府は計画を白紙撤回するが、その後核実験施設がポリネシアのムルロア環礁に移されることとなった。②は先述のアルジェリア独立承認政策などがその事例だが、コルシカや地中海地方では、土地を失ったフランス系植民者「コロン（蔑称で「ピエ・ノワール」とも呼ばれた）」の受け入れ先としての役割を押し付けられ、現地住民との間で土地をめぐるトラブルがおこり、新住民となった「コロ

ン」が地元住民に比べて破格に政府から優遇されていたことに対する嫌悪感もあいまって、深刻な地域問題となった。こうしたことから地域主義はド＝ゴールの政策そのものに対する反旗とも見てよいだろう。

（34）デャグム Ghjacumu はフランス名のジャック Jacques に相当するコルシカ名。

（35）Ghjuvanpaulu フランス名ジャン・ポール Jean-Paul

（36）Petru　フランス名ピエール Pierre

（37）Canta u Populu Corsu、「歌うコルシカ民族」の意。Le peuple corse chante。

（38）地域主義運動家エドモン・シメオーニと彼の同人がアルジェリア帰還者農民のワイン製造における不当加糖を糾弾するため、帰還農民のワインカーヴを占拠したことから始まる事件。一週間に及ぶ地域主義勢力とフランス内務当局との闘争に発展し、機動隊に二名の死者が出る。シメオーニたちは逮捕される。

（39）P.-J.Catinchi, 1999, pp.33-35.

（40）Chjami Aghjalesi 麦を挽き割る時の「こだま」の意

（41）I Muvrini「子ヤギの群」の意

（42）Ricordu　「記憶」souvenir を意味するコルシカ語

（43）「イ・ムヴリーニ」は島のレコード会社リゴールドゥに対して破格の報酬を請求し、リゴールドゥ側がこれを拒否したため、リゴールドゥを脱退し、ソニーと契約した（「イズラ・ウェーッラ」のメンバーで元イ・ムヴリーニのジャン・マッテイ氏からの聞き取り。二〇〇〇年三月）

（44）一般に「ワールドミュージック」とはフランスでは、英語あるいはこれに準じた言語で歌われるアメリカでプロデュースされたロック、ポップス、レゲエ等に対抗するパリでプロデュースされた非英語圏の音楽、と考えられている。具体的にはアルジェリアの「ライ」やジプシー・キングスなどがその事例である。だが、双方とも世界的な音楽産業によって市場化されているという点では同じである。

（45）コルシカの知識人や言語運動家、教育関係者は公共機関でコルシカ語をフランス語と平等に扱うという「コ・オフィシャリテ（共＝公用性、一言語を公用語とする国の特定地域においてのみ二言語を公用語とする制度）」論が掲げられているが、フランスは憲法第二条で「共和国の言語はフランス語である」と定められていることを楯にこれに否定的な見解を下す向きがある。